

未来へのメッセージ 広げる高齢者福祉 — 知識と経験、そして確かな技術へ — 〈第11回かながわ高齢者福祉研究大会開催報告〉

7月3日、パシフィ

コ横浜で、高齢者福祉の最前線で活躍する福祉従事者、介護・福祉を志す学生、社会福祉

分野の大学など2千名を超える参加者による、第11回かながわ高齢者福祉研究大会が開催されました。

本大会は、「高齢者福祉を担う」「人材確保・育成・定着」を目的に、本会老人福祉施設協議会委員が中心となり、大会ごとに実行委員会を組織し、研究活動や現場で蓄積された介護技術の発表プログラムなどの企

画・運営を行っています。

研究発表のエントリーは16テーマ165題。特に「認知症ケア・ターミナルケア・医療との連携」に関する発表が多く、年々発表数が増加傾向にあります。初めて参加した発表者からは「昨年度から準備を進めてきた。緊張したが、日ごろのケアを振り返るきっかけとなり、施設として介護全般を見直す機会となる」などの感想が挙がっています。

福祉分野の喫緊の課題である「福祉人材の確保」「利用者への人権擁護」への注目は例年どおり高い一方



大会には介護・福祉のプロを目指す多くの学生も参加しました



研究発表は11年間でのべ1,458題。立ち見も出るほど混み合う会場で熱心にメモをとる参加者たち



介護技術発表は、実技発表者・説明者が2人1組となり発表。所属施設のユニフォームが輝きます！

で、若年性認知症や高次脳機能障害など、新しい報告も生まれています。

また、今年で2回目となる介護技術発表のエントリーは20組。「移動介護」「レクリエーション」「介護食の展示・食事介助」「緊急時対応」の4テーマに再編して行いました。あらかじめ設定した演題について、介護方法の根拠を検討し、手順や配慮点をシートにまとめた上で、発表方法を練り上げます。

「緊急時対応」ではノロウイルス発生時の対応を居室編・食堂編に分けて、嘔吐のデモンストラーションから始める緻密な企画となりました。さらに、「レクリエーション」では、高齢者疑似体験セットを装着した介護福祉士養成校の学生8人が利用者役となり、発表に協力しながら審査にも協力しました。参加した学生が

らは「出身地や趣味、疾患等を理解した上で、そばに来て対応してもらうことが、こんなにも安心や満足、喜びにつながる」とは今まで分かっていなかった。心地良く、素のままに楽しむことのできるレクリエーションに感動した」という感想も聞かれ、大会を通じて、学生が介護・福祉のプロの仕事に直接触れる機会ともなっています。

また今年初めての取り組みとして、文字や写真で活動成果をまとめ、発表する「ポスターセッション」を行い、東日本大震災支援活動をテーマに7施設・法人が発表。参加者と具体的な支援活動について、情報交換する場面もみられました。

一方、各発表と関連した就職相談コーナー（85法人88ブース）を、ハローワーク横浜並びに本会かながわ福祉人材センターと連携して展開し、県内を中心に500人を超える介護福祉士を目指す学生の参加があったほか、協賛企業による介護用品・福祉機器等の展示（34社39ブース）も過去最大規模で行われました。多くの高齢者福祉従事者や教育関係者等の熱意に支えられ、今後も本県の高齢者福祉・介護福祉の最前線を発信していきます。

（社会福祉施設・団体担当）